

映画の詩



udauda

目次

手紙	1
夏の日	2
友だち	3
もう一つの未来	4
束縛	5
すれ違い	6
解けかけの魔法	7
恋	8
もしも	9
確信犯	10
信号待ち	11
歩いていこう	12
芸術	13
三十人	14
キャッチボール	15
伝説	16
教室	17
区別	18
一日限り	19
記憶	20
旅路	21
プレゼント	22
ユートピア	23
確かに	24
欲望	25
過去	26
あなた	27
人生	28
衝突	29
さよなら	30
祈り	31
成長	32

寄り道	33
初めての恋	34
作品	35

手紙

あなたから送られた手紙で
私のもやもやは始まった

私から送られてきた手紙に
あなたはきっと複雑な顔

手紙が最後に行き着く先は
うまく言葉にならない気持ち

想いが最後に向かうのは
届くはずのない住所

夏の日

言いたいことを言い残した
夏の日

永遠だと思っていた
昼下がり

二度と取り戻せない
高鳴り

見送ることしかできなかった
流れ星

友だち

離れていても
もう会えなくても
ずっと友だち

たまに会って
並んでいるだけ
それも友だち

一緒にトイレも行かない
会話もあまり続かない
だけど友だち

踏み込めそうで
立ち入りたくない
もどかしい友だち

けんかをして
分かり合えなくても
許し合えてる
そんな友だち

もう一つの未来

さよなら僕の
もう一つの未来

君と分かり合えてた
もう一つの未来

昨日はもう
やり直せない
やり直したくもない

僕は一つの僕しか
引き受けていけない

あの頃の僕と君だけを
未来につれてはいけない

束縛

あなたがここにいてだけで
私はだんだん不自由になる
あなたがここにいてだけで
私はしだいに惨めになる

あなたが何をしなくても
私は息苦しくなってくる
あなたが何もしないから
私はますます苦しくなる

愛してると
抱きしめて
信じてると
束縛する

言葉は
同じなのに
噛み合わない
想い

すれ違い

二人で語っていた
理想の未来の計画を
僕は生活の中で忘れた

建前でしか
存在しなくなった言葉を
君はまだ信じていた

君に見えていた希望が
僕には見えなかった
それだけの話

僕が挑発した口げんかに
乗らないままで
君はいなくなった

解けかけの魔法

解けかけの魔法が
時を溶かしはじめる

借り物の翼が
背中から剥がれようとしている

待って
せっかく描いた未来が
幻になるなんて許せない

待って
理想ばかりが美しい世界に
私はきっと絶えられない

消えかけの魔法を
かき集めて
まだ夢の続きを

取れかけの翼を
接着剤でくっつけて
まだ先へ
退屈な現実の向こうへ
行けるところまで

恋

大人ぶって過ごした
日々は無惨に砕け散り
初めての恋の前で
赤子のように泣きじゃくる

求めるままの体
赴くままの心
触れても残る虚しさが
露にする命の姿

恋に落ちて
恋に溺れ
浮き上がってきたのは
私の知らない私

もしも

暮れ切った空の下を
抜けて階段を上る
やたら静かなアパートに
鍵音が響き渡る

誰もいない部屋に帰って
誰もいないことに気が付けば
向き合いたくない自分と
向き合うはめになる

行き詰った今日に
もしもが溢れてくる
捨てきれない
でもどうすりゃいいのか分からない
もしもを持て余す

確信犯

問題はすでに解いているのに
答えを出す気になれない

人の気持ちは上手に
何かとイコールできない

どこまでも続く円周率のように
割り切れなさが残っている

解けたはずの問題を
わざと間違える確信犯

信号待ち

僕は望まない旅をする
望まれない旅人
なけなしのお金で
命をつなぐ

ただ今日を
さまよい歩く日々
住み慣れた場所を
失ってからは

信号待ちで
止まった景色
急に過去が
追いついてくる

懐かしさに
呼び止められても
僕には明日がある

青になった信号
声を振り切る勢いで
駆け渡る横断歩道

歩いていこう

歩いていこう

想いの分だけ踏みしめて

過去の悔いへと逢いに行く

歩いていこう

道行く人との偶然の関わり

思い出を話したことも思い出

幼く広がる青い草原

遠くを包む険しい山々

壮大な景色は

ゆったりとした時間を持っている

芸術

天才芸術家の悩みは
凡人には分からない
凡人が芸術家であることの悩みは
それ以上に理解されない

迷いの中に芸術はあると
破壊の果てに芸術はあると
生死の境目に芸術はあると
芸術論を表現した時点で
どこかありきたりなものに映る

解き放てない発想に
もがきゆく様はまさに芸術
それもどこかで見た模倣のようで

三十人

伝わるのは
ずっと遠い未来のこと

伸びるのは
目には見えない部分

分かり合えず
息が詰まりそうな日々も
教室の扉を開く

立ち上がり
席に着いた
三十人の心を見渡す

キャッチボール

投げつけられた想いを
受け止める
少しぐらいのしびれが
心を奮わす

受け止めた想いを
投げ返す
的外れでも
受け取ってくれた

譲れない気持ちを
君にだけ託す
一人じゃなれない
本気になる

伝説

あなたはいつも遠くを見ていた
あなたはより大きなものになろうとしていた
譲れない欲望を抱いて
引き返せない道を歩いていた

あなたは輝いていた
善悪を超えた命のきらめきだった
闇を背負うことと引き換えに
あなたは大きな光を受けた

あなたは孤独だった
いつも一人でなくみんなを求めていた
忘れられるのを怖がり
闘う相手をいつも探していた

みんなが知ってる伝説と
誰も分からぬ寂しさをあなたは生きた
あなたの痛みは
みんなにとっての希望だった

教室

またその言葉？
またその展開かよ
もう収まりのいい言葉じゃ
収まりがつかない

僕らの悩みは
いつだって平凡で
もう飽きた
誰か何とかしてよ

その場が楽しければ
悟ったふりしてれば
探りあうことにばかり
心を費やして

生半可な気持ちで
生きていけた命だ
生ぬるい闇に
埋もれたまま

周りをいくら見下しても
その上に自分が見当たらない
どこにも見当たらない
ざわめきの止まない
この教室にいない

区別

この人じゃなきゃだ
あの人よりもこの人
誰かと誰かを区別する愛

恋愛 家族愛 隣人愛
それとあれとで区別できない
曖昧でずうずうしい愛

あなたへの想いは
何と呼ぶのだろう
全てをごちゃまぜにしたいなくて
私の中に引いた一線

一日限り

一日限りのあなたになら
全て話せると思った

一日限りのあなたになら
本当の私になれると思った

早く過ぎてほしいと思った
一日なのに
今はどうなのかよく分からない

もうすぐ
朝焼けの街を
私は一人
歩いていかなければならない

駅の手前
車を降りて
始めて感じられた
孤独

記憶

心が音のない声を
心が景色のない場面を
何かを思い出すとき
心はただ音楽のように流れている

長い時間を共に味わい
短い時間を共に駆け抜け
君の記憶になりたい
素敵な記憶を作り出したい

未来にたった一つだけ
持っていけるなら
その答えになる記憶を
君にあげたい

旅路

生き場所を探そうとして
帰る場所を無くしてしまうんだ

偶然出会った二人
満たされなさに引き寄せられ

生き場所を探そうとして
どうして前に進めなくなるんだ

無邪気さの反動
無知さが生んだ希望に
やがて追い詰められ

生き場所を探してるだけなのに
どうして涙はこぼれていくんだ

たとえそこが帰る場所であっても
死に場所を探すつもりはないんだ

プレゼント

無力感に苛まれている
あなただからこそ
贈れるプレゼントがある
踏み出すことに怯えている
あなただからこそ
贈れるプレゼントがある

孤独に打ちひしがれている
あなただからこそ
受け取れるプレゼントがある
空虚さを抱いている
あなただからこそ
受け取れるプレゼントがある

今のあなたにしか
贈れないプレゼントがある
この場面でしか
受け取れないプレゼントがある

贈ることでもらっている
プレゼントがある
もらうことで贈っている
プレゼントがある

ユートピア

慰め合い
足を引っ張り合い
このユートピアから
抜け出るものがないように
塀の中に自分達を
閉じ込めてきた青春

小さな世界の
神様を辞めて
私はこの世界の
平凡な大人になった
心の天秤に
天使と悪魔を
揺らし続けたままで

確かに

時間が過ぎてしまっても
僕は確かにそこにいた

記憶が消えてしまっても
僕は確かにそこにいた

命が途絶えてしまっても
僕は確かにそこにいた

一つの恋が終わっても
僕は確かにそこにいた
君とそこにいた

欲望

僕はなるべく人に紛れ
人に言えない欲望を
隠しながら生きているつもり

会話の切れ端
ついしてしまう仕草の中
どこかで漏らしてしまっている気がして
不安

人々は欲望を空に願う
それぞれに違う言葉で
流れ星に3回
その後も数万回

欲望で成長し
欲望で肥大化した世界
言葉が束ねられた時
欲望には順位しか残らない

何でもなく過ぎていく一日
行き所のない欲望を
心は再び二乗させ
やりきれない夜に沈む

過去

口にすることも
許されない過去を抱いてから
私の中で時間が止まった

書き換えられた歴史を上
未来へ向かう人々を上
あなたは何度消されたのだろう

変わりゆく街の中で
奪われた過去だけが
今を生き続ける

いつものように玄関の
扉を開いて旅立ったまま
私の元に戻ってこない物語

あなた

どんな道を歩いても
隣にはあなたがいた
たまに微笑んで
たまに怒って

どんな夢を歩いても
あなたの胸に
たどり着いてしまう
どんな道を外れても

一人で突っ走って
一人で転んで
擦り切れて
帰着いた家に
あなたはいた
いてくれたのだとは
気づかずにいた

人生

僕らの時は後戻りできないのだと
衰えゆく体は少しずつ教えてる

一つの生き方を選んできた
二つ目の生き方を頭によぎらせながら

幸せの大きさは計ることができない
死をもってしても

虚無とかけがえなさの狭間で
揺れる小さな命

死がもたらすものを知らない
その向こうにある世界などもっとだ

「永遠」と呼ばれる眠りについても
いつか叩き起こされる日が来るかもしれない

衝突

火花を散らして
僕らの命は奏であう

何度も衝突しながら
僕らは少しずつ歩み寄る

体という壁は
心でしか越えられない

心に最後に残った壁は
体でしか越えられない

一瞬の痛みの中に
生まれ来る未来の音を聞いた

さよなら

何色にも染まりたくなくて
僕らは透明になった
誰にも気づかれずに
僕らは崩れていった

ともに生きることは
たのしくてむなしくて
なんだかよく分からないけど
生まれた時からきっと
つけなきゃいけないけじめがあった

僕らが終わっても
世界はずっと続いていく
だから僕はさよならを言う

祈り

日々に
祈りを織り込んで
人生は形作られる

言葉が
強く鳴り響く時も
心は
静けさの中にある

世界が移り気に
姿を変えていく
大きなうねりを掻き分け
たどり着いた
たった一つの生き方

強風に煽られながら
建てられていく家のような
時代という暴力への
日常は静かなる抵抗

成長

狭い世界の中で
必死に適応しようとしてきた
上手く立ち回ろうとしてきた
そうやって成長してきたのに

無理やりこじ開けられて
広くなった世界で
これまでのやり方は否定される
むしろ邪魔だと言われる

それが一番と信じてきたやり方を
今さら否定できなくて
だけど従ってきた価値観の
抛りどころももうなくて

どこへ生きて行こうか
僕の芽が伸びていく方へ
歌いながら行こうか
僕を育てに

寄り道

とりとめのない話
まだしていたかったのに
もう行っちゃうのか

眼にした風景に
ケチ付けたり
通り過ぎた犬や小鳥の
蘊蓄を言い合ったりしたかったんだよ

「用事あるから」って
急に大人の顔しやがって
俺はこれからどうすりゃいいんだ

逃げるように迷い込んだ
寄り道はいつの間にか
本道に戻りつつある

昼下がりの木漏れ日が差して
この街も意外にいいもんだって
——もう行っちゃうのか。

初めての恋

あなたにあいたくて
作った口実がある

あなたにほめられたくて
犯した過ちがある

抑えられない鼓動は
埋められない寂しさは
いつの間にか
あなたに向かっていて

あのドアを開けば
まだあなたがいる気がする
でも開くことはない

初めての恋は
終われない
消せない痛みの限り

作品

離れても
いつも届いていた
あなたの心を
くすぐってたい

会えない時も
あなたの今に
生きていたい
思い出話としてじゃなく

写真になって
文字になって
あなたが忘れ得ない
作品になって

映画の詩

著 者 udauda

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
